

# おとさだ 乙 貞

第263号 通巻45第6号  
令和8（2026）年2月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター  
〒524-0212 守山市服部町2250番地

TEL&Fax 077(585)4397  
Mail [maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp](mailto:maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp)

新年を迎えて早ひと月が経ちました。このひと月の間に、様々な年始めの行事が慣行されてきましたが、今月一日は五穀豊穡、商売繁盛を祈願する初午、そして15日には初庚申を迎えます。

一昨年の大河ドラマ「光る君へ」でも、天元5年、この年の初庚申は2月24日、平安貴族が夜を徹しての「庚申待」のシーンが映し出されていました。

古代中国の道教思想では、人の頭と体、足に潜む三尸<sup>さんし</sup>という虫がその人の日々の行いをつぶさに見聞し、60日毎に巡ってくる庚申の日に眠りについた人体から離れ、天に上って帝釈天に報告する。そして罪過があれば、そのペナルティーでその人の寿命が削られると信じられていました。そのことから、平安貴族の間では、この日は三尸の虫が体内から離れないように夜を徹して過ごす庚申待が広まり、それが江戸時代になると世俗化して、村々では庚申講として広まったとされています。

守山市史（旧書）でも、近世の習俗の中にも庚申講が若干記述されていますが、どのような様態で執り行われていたかは詳らかにすることはできません。しかし、惣村民の品位向上に資していたことは容易に想像できます。初庚申を前に、三尸に監視されていても、恥ずかしくない日々を送ることを今年の努力目標とします。

それでは、昨年12月以降に実施しました発掘調査と当センターの事業概要について、お知らせします。

## 発掘調査だより

### 高関遺跡第19次調査

本調査は、伊勢町字下阿ノ図での共同住宅建築に先立ち実施したもので、昨年11月13日～12月3日までの期間で、約300㎡を発掘調査しました。

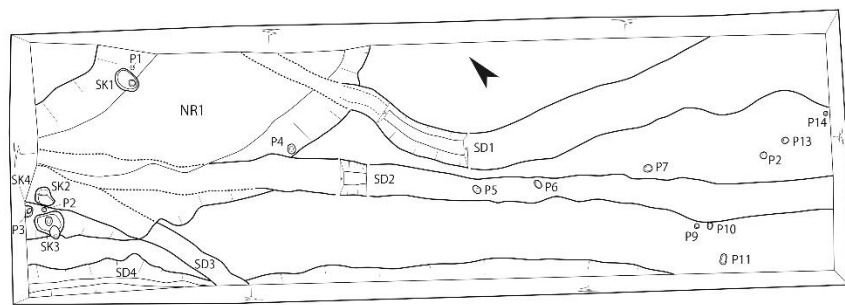
今回の調査では、土壌4基（SK1～4）と溝4条（SD1～4）、多数のピット、そして自然流路（NR1）を検出しました。

まず、土壌SK1～4は、いずれも調査地北西辺で検出したものです。形状や規模は様々です。いずれからも遺物の出土はなく、時期など詳細は不明です。

溝のうち、SD2は調査地中央を調査区画に沿うように北西－南東方向に直線に伸びる溝で、幅1.2m前後で約40cmの深さを測ります。



高関遺跡調査位置図



検出遺構平面図

0 20m

この溝からは古墳時代後期の土師器の高坏が出土しています。

また、調査区北隅で検出した自然流路（NR1）は、幅10m、深さ90cmの規模を測り、最下層から古墳時代前期の受口状口縁甕が出土しています。（沖田）

## 北三反田遺跡 第1次調査

今市町字北三反田において、約9,000㎡の工場建設が計画され、昨年に試掘調査を実施した結果、遺構が検出され、新たな遺跡として字名から北三反田遺跡として周知されました。

本調査は、遺構が見つかった建物と調整池の一部を対象に、それぞれ調査区1、調査区2として、昨年の12月1日から今年1月21日まで調査を行いました。

その結果、調査区1では、南北方向の溝とピットを検出しました。溝1は幅2m～2.6m、深さ約36cmを測り、古墳時代後期の土師器が出土しています。

調査区2では、掘立柱建物（SB-1～8）の他、溝3条、土坑2基と多数のピットを検出しています。SB-1～8の建物規模は表に掲げていますが、建物柱穴からは土師器皿や黒色土器碗などが出土しており、およそ13世紀、鎌倉時代の時期が考えられます。

次に、3条の溝のうち溝1は、北西壁面から直線的に約8m伸びて終息します。幅約60cm、深さ10cm余りを測ります。溝2も西壁から北方に1m伸びる溝で、ともに土師器皿、黒色土器碗などが出土していて、SB1～8と併存するものと考えられますが、西壁に沿って検出した溝3からは時期を異にする灰釉碗が出土していて、11世紀頃に遡るものと考えられます。

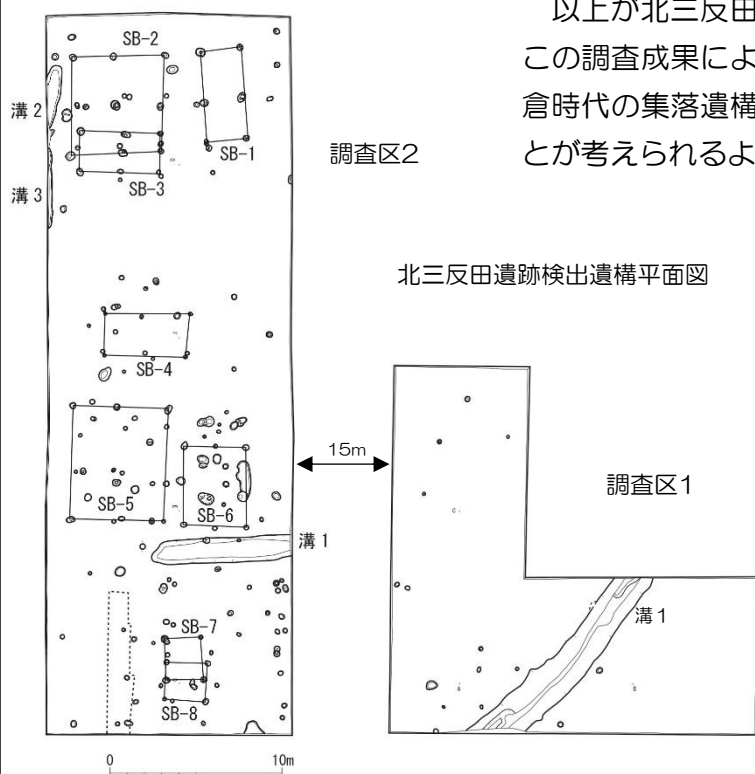
以上が北三反田遺跡の端緒となった調査の概要です。この調査成果によって、北三反田遺跡は古墳時代から鎌倉時代の集落遺構で、当地および周辺に広がっていることが考えられるようになりました。（畑本）



北三反田遺跡調査位置図



北三反田遺跡調査風景写真



北三反田遺跡検出遺構平面図

SB-1～8 建物規模一覧表

建 物	桁 行		梁 行		方位 N- ° -E
	間	m	間	m	
SB-1	2	5.6	1	2.3	130
SB-2	2	5.6	2	5.4	135
SB-3	2	4.5	1	2.5	45
SB-4	2	5.0	1	2.4	45
SB-5	2	6.5	2	5.5	135
SB-6	2	4.8	2	3.5	135
SB-7	1	2.5	1	2.3	130
SB-8	1	2.3	1	2.3	138



## 令和7年度の歴史入門講座を閉講しました

昨年12月と本年1月に歴入門講座第5、6講を開催しました。そして、第6講をもちまして、令和7年度歴史入門講座を閉講いたしました。

第5講は12月20日（土）、「滋賀県下における猿投窯産須恵器の流入 - 古墳時代から飛鳥時代にかけて - 」をテーマに高島悠希さん（〔公財〕滋賀県文化財保護協会）に講演していただきました。

講師の高島さんは中世六古窯として知られる窯業の町・瀬戸市生まれで、研究テーマの一つが大阪府の陶邑窯と並ぶ須恵器の2大生産拠点であった愛知県猿投窯産の須恵器です。

今回の講演では、須恵器についての興味がそそられるベーシックなお話を導入部に、陶邑窯と猿投窯須恵器の違い



第5講開催風景

や、古墳時代～飛鳥時代の猿投産須恵器の滋賀県内への流入について、お話ししていただきました。

最終講となった第6講は1月17日（土）、「笠原南遺跡の調査成果 - 発掘された卑弥呼の時代のムラ そして古代の文字資料 - 」をテーマに開催しました。

講師は木下義信さん（〔公財〕滋賀県文化財保護協会）、昨年から守山市内の笠原南遺跡の発掘調査を担当されていて、弥生時代～古墳時代の過渡期に築造された前方後方形周溝墓の検出、そして、奈良・平安時代の墨書土器などの出土から、遺跡像と今後の検証課題を明快にお話していただきました。

高島さん、木下さん、ご講演ありがとうございました！

また、第1～4講でご講演いただきました方々につきましても講演風景写真を掲げまして謝意を表します。ありがとうございました。



第6講開催風景



小林裕季さん（第1講）



田中久雄さん（第2講）



岡田有矢さん（第3講）



岩橋隆浩さん（第4講）

## 埋蔵文化財センター友の会

### 第4回見学会を開催しました！

埋蔵文化財センター友の会第4回見学会を12月5日（金）に開催しました。

2025年最後となる今回の見学先は三重県でした。午前中



斎宮歴史博物館見学風景



楽しみのひとつ、昼食風景

に MieMu（三重県総合博物館）で開催されている「発掘された日本列島2025」を見学しました。

博物館近辺の「風に吹かれて」でビューフェ形式の昼食をとり、午後は明和町の斎宮歴史博物館を訪れました。

斎宮は、伊勢神宮の神々に仕えた斎王の宮殿で、斎王には、新たに即位した天皇の内親王が選ばれ、都から近江（滋賀）を経て、斎宮で斎王としての使命を果たします。天武朝に始まった斎王の歴史を学ぶことができました。

今回は厳しい寒さを覚悟していましたが、穏やかな天候に恵まれた見学会になりました。MieMuならびに斎宮歴史博物館の関係者の皆様にお礼申し上げます。

会員の皆様には次回、3月6日（金）の見学会にも、ぜひご参加ください。また、このような活動に興味のある方の入会をお待ちしています。



「発掘された日本列島2025」見学風景

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』や Facebook からもご覧いただけます！



歴史のまち守山はコチラから  
<http://moriyama-bunkazai.org>

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶  
<https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks>



【後記】2月は如月<sup>きさらぎ</sup>、中国の「二月は如となす」を引用したものです。如月には、厳しい冬が終わり、万物が動き出す季節という意味が込められていますが、日本では、まだまだ余寒厳しい日には衣服を重ね着してしのぐことから如月<sup>きさらぎ</sup>を衣更着と無理矢理に訓読みして、大変ハイブリットな和風名月といえます。もともと旧暦の2月は、新暦では3月下旬から4月上旬の時期にあたり。リアルな季節感があります。

さて、2月には如月という和風名月のほかに令月という異称もあります。今上天皇のお生まれ月であることもさもありなん、令和の改元で脚光を浴び、ご存じいただいていると思います。「万葉集」に納められた歌の一節「初春令月 気淑風和」、初春のよき月にして、空気は美しく風はやわらかにと現代語訳することができる令月の令と、風和の和から生まれた元号です。平成までの元号のように漢籍ではなく、日本の古典文学を典拠として生まれた元号であることも注目されました。

この元号、かつては中国文化を受容した東アジア諸国で、漢字、暦とともに共有されていましたが、現在では、日本でのみ西暦と併用されていて、改元は「一世一元の制」のもとで天皇の即位に伴い行われています。しかし、近世以前の改元は天皇即位時にとどまらず、例えば、日本列島が大災害を被った際の国民の疲弊したメンタルのリセットを目的とした改元も行われていました。元号の要否についての議論が上っていますが、今すぐ世界水準を目指すのではなく、伝統文化の一つとして元号継承するのも一考ではないでしょうか。（馬耳東風）